

いつもの夢の中 君を見つけ走る 青い空白い雲の下で
君の後ろ姿 ゆっくり歩いてく だけどなぜか追いつかないまま
いつもの朝が来た カーテンを開いて 窓の外揺れる電線二本
名も知らない鳥が 寄り添い合い歌う こんな夢もたまには見たいな

黒い もやもや 流すように 飲み込む水が染みていく
まだ まぶた 重いけれど お気に入りの靴履いて

夢と一緒に 後ろ姿に 心が弾むわりには
全く足が 動かさなくて 夢より弱虫だ
また一步一步 遠くなってく 振り向いてくれないかな？
声をかけようか 肩を叩こうか 頭の中だけで 視線は靴の先

変わらないスピード 埋まらない間隔 歩道のブロックに乗る気もない
立ち止まる信号 曲がり角で消えた 背中をただただ見送っていた
辿り着く先には 大勢の人混み 紛れても光る君の笑顔
チラチラ見てる事 気付いたりするかな 途端に恥ずかしくなってきた

声は はっきり 聞こえる距離 だからこそもどかしくて
ついつい オーバーリアクション 私を見て欲しくて

そんな不器用に 過ごす毎日 何か変わる気配はない
こんな思いを こんな気持ちを 淡い恋と呼ぶの？
そっとポケットに 忍ばせていた 小さな赤いリボンは
今日の私の ラッキーアイテム お願い 力を貸して

また離れていく 話しかけなくちゃ 今しかないんだ
何度も空回り 気持ちが先走り 転ぶつま先

なぜこんなにも うまくいかない 惨めだな私なんて
微笑み合って 君の隣に いただけなのにな
そっと手を貸して くれた君の目 真っ直ぐ見つめ合えたの
夢の続きは これだったのかな 考えもしなかった
二人 スタートを切る